

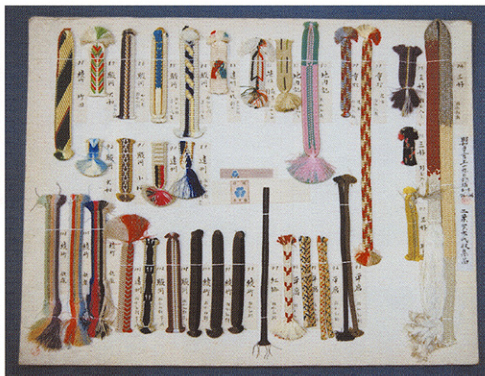
かたりべ 88

豊島区立郷土資料館だより



1999年編纂

右：土山氏は同業者一葉氏収集のものも編纂。台紙に紐を糸で縫い付け、製作年・使用台・模様名称を書き添える。上：一九四二年、当時一二歳の女の子が着た羽織。羽織紐は小さなおしやれ。下：土山氏は池袋の紐屋橋詰正男商店の娘さんが保持していたものも編纂。



一九七七年編纂

あらためてご報告したいと思っています。

さて、世界に目を向けると、英語圏を中心に、日本の組紐文化が伝播されているといわれています。本年一月、京都で第一回組紐国際会議が開かれます。そこでは、館蔵の羽織紐と帯締め、そしてその製造工程等を紹介する予定です。参加国の方の反響については、

(福岡)

世界に通じる”KUMIHIMO”

当館の収蔵庫には、明治中期から昭和五〇年代までに作られた羽織紐と帯締めが保管されています。いずれも豊島区内で紐屋をしていた方や組紐職人の方から寄贈されたもので、収集のきっかけは、一九九四年、故土山弥太郎氏（池袋・紐屋）から、廃業した同業者の組紐製作道具と製品が寄贈されたことでした。その後、調査を進めていくうちに、戦前までの豊島区域には多くの組紐職人さんが住み、人々の需要に応えるために日夜研鑽し、最終的には自分独自の組み方を考案することに力を注いだことがわかりました。しかし、次第に着物を着る人が減少していきます。同氏は、江戸時代からの技術を継承する東京の組紐が廃れることを危惧し、昭和五〇年代には組紐の試作品や組見本等を積極的に収集します。当館では、一九九九年二月、『東京の伝統「組紐の技と職人」展を開催しましたが、その後も組紐資料が当館に集まり、現在に至っています。

郷土資料館企画展「A・L・A・SUGAMOへあ・る・すがも」誌上展

郷土資料館では、現在、企画展「A・L・A・SUGAMOへあ・る・すがも」

「中山道と果鴨地域」を開催しています。これは、江戸時代の果鴨地域を中山道との関わりから考えてみようとするもので、以下の四つのコーナーから構成されています。

I 果鴨庚申塚の風景

中山道の立場（休憩所）であった果鴨庚申塚を取り上げ、『江戸名所図会』に収められている「果鴨庚申塚」の拡大パネルや当時の旅道具、荷駄馬に装着した荷鞍などを展示しています。企画展の導入部分として、当時の旅行の雰囲気を感じていただきたいと思います。



館内風景

II 果鴨村と中山道

果鴨地域全域がまだ「村」であった時代の資料を中心に展示しています。果鴨村絵図、領主であった増上寺に遺された古文書類、中山道の街道図など、この時期の街道図や絵図類のなかには、「すがも」という文言が登場せず、日本橋の次に板橋宿が描かれているケースもよくあります。

III 江戸の拡大と果鴨町

村の東南から西北方向に走る中山道沿



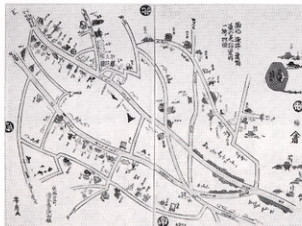
「果鴨庚申塚」（江戸名所図会）所収

いに、約一・三キロメートルにわたって

展開した果鴨町を中心に扱ったコーナーです。果鴨町は、下組・下中組・上中組・上組の四つに分かれ、それぞれに木戸が渡され、自身番屋が置かれるなど、各組ごとに日常的なまとまりが形成されていたようです。また、幕末に作成された「果鴨町軒別絵図」によると、飲食店は「三八軒中わずかに一軒（五％）で、青物屋・酒屋といった小売店が四〇％以上を占めていたことがわかります。

IV 果鴨町のにぎわいと植物栽培

果鴨町の植木屋たちによる菊作りと、



駒込・染井・果鴨 菊の見独案内一覧ノ地図



現在の果鴨地蔵通りの賑わい

新興の植木屋たちの活躍について紹介したコーナーです。果鴨の菊作りは一八世紀半ばまでには始められ、毎年植木屋たちが見せ方や演出方法を考案して、見物客に披露していたものと考えられます。その結果、一九世紀になって三度にわたる菊見ブームが起り、果鴨町に菊見客が大挙して押し寄せ、経済的効果をもたらしたものと思われます。現在の果鴨地域の賑わいは、江戸時代の菊見をその出発点として位置づけることができるかも知れません。

会期中たくさんの方々のご来館をお待ちしております。

（秋山）

★会期…二月九日（日）★休館日…

毎週月曜日および一月一八日（日）、一

月三日（木）★企画展みどころ解説…

一月二四日（土）一四時～一五時（事前

申し込み不要）★企画展終了後の臨時

休館…二月一〇日（月）～一八日（火）

焼け跡からの豊島区復興の手だてをさぐる 都市計画？ 人集め？ — 敗戦直後の懇談会の発言から —

戦争が終って間もない一九四五（昭和二〇）年一月六日、豊島区役所が主催して「豊島区を如何にして復興せしむべきか」という懇談会が開かれました。参加したのは区長・区内各警察署長・立教中学校長・区会議員・業者代表・地主代表の面々でした。

ものがあります。たしかに支持基盤の変動は大きかったでしょう。しかし、何をどう善処するのでしょうか。区画整然とした都市の出現を期待立教中学校長は、都市計画の実施を提唱しています。そこでは「住居地区・工業・商業・緑地等各地区の基礎を設定と共に道路計画を優先して」と言い、その道路は放射状ではなく「京都市の様に区画整然とした都市の出現を期待する」と

しています。さらに生活必需品の取り扱い店は「住居地区の中に点在する事が消費者に便宜で」「その他は一定地区にまとめて良い」と、具体的に述べています。

人を集めることが第一

最後に、業者の意見です。復興発展の第一は人を集めることだと言います。そのための施策として次のように主張します。

「三業を急速に復興する事と国民酒場を廃して業者に配給して営業をやらせたら町もぎやかになる」。

三業とは料理屋・待合・芸者屋のことです。また、国民酒場は配給制になった酒類を一定の制限で客に出す、一九四四（昭和一九）年に東京都がはじめた公設の酒場ですが、そうした制限をはらった自由営業を再開せよということでしょう。

区内の約三分の二の地域が空襲によって焼かれ、召集や疎開などで二〇〇万をこえていた人口も九万人に激減した豊島区をどうやって復興するかは、文字通り緊急課題であつたわけです。この懇談会の模様を記録した果嶋警察署長の文書「豊島区内ニ於ケル住宅其ノ他ニ関スル懇談会開催ニ関スル件」（七日付、国立公文書館所蔵）によって、参加者の発言を見てみましょう。

「三業を急速に復興する事と国民酒場を廃して業者に配給して営業をやらせたら町もぎやかになる」。

三業とは料理屋・待合・芸者屋のことです。また、国民酒場は配給制になった酒類を一定の制限で客に出す、一九四四（昭和一九）年に東京都がはじめた公設の酒場ですが、そうした制限をはらった自由営業を再開せよということでしょう。

遊興施設によって人を集めよう、それが復興への道だという考えです。

それぞれの立場からの復興策が主張されました。さて、豊島区の戦後復興はどの道をたどったのでしょうか。

（史料の引用の際には、片假名を平仮名にしました。漢字をかなにしたものもあります。）

（あおき）

最初に、地主側の発言では、元居住者で地所を借りたといつて来る人が多いが、「困る事には地代を幾ら貰つてよいものやら」としています。空襲で焼け出された人、建物疎開で家を失った人など、

元場所です仕事を続けたいと思う人がいても、戦時中の統制に代わる地代政策がはつきりしないので地主も積極的に貸せないということでしょう。

また、「道路の関係もあり早く当局のはつきりした指示を戴きましたら復興も早いと思います」とも述べています。後の立教中学校長の発言でも出て来ますが、焼け跡の整理の際の道路計画が決まらないうと土地の取り引きも進まないというわけでした。

仮校舎の建設

区会議員 地方自治法施行以前の名称は、次のようなことを提案しています。

豊島区の発展を阻害している「池袋駅の地下道を完全なものに」、「疎開から復帰する児童の為に仮校舎の建設も」、「復興軍人の衣料切符も早く発行して欲しい」

いずれも切実な問題です。なお、区会議員ならではの発言として議員選挙の早期実施に関連して、罹災地と非罹災地とでは選挙地盤が「相当混乱する」と思われますが此の点当局の善処を望む」という

ものがあります。たしかに支持基盤の変動は大きかったでしょう。しかし、何をどう善処するのでしょうか。区画整然とした都市の出現を期待立教中学校長は、都市計画の実施を提唱しています。そこでは「住居地区・工業・商業・緑地等各地区の基礎を設定と共に道路計画を優先して」と言い、その道路は放射状ではなく「京都市の様に区画整然とした都市の出現を期待する」と

ものがあります。たしかに支持基盤の変動は大きかったでしょう。しかし、何をどう善処するのでしょうか。区画整然とした都市の出現を期待立教中学校長は、都市計画の実施を提唱しています。そこでは「住居地区・工業・商業・緑地等各地区の基礎を設定と共に道路計画を優先して」と言い、その道路は放射状ではなく「京都市の様に区画整然とした都市の出現を期待する」と

ものがあります。たしかに支持基盤の変動は大きかったでしょう。しかし、何をどう善処するのでしょうか。区画整然とした都市の出現を期待立教中学校長は、都市計画の実施を提唱しています。そこでは「住居地区・工業・商業・緑地等各地区の基礎を設定と共に道路計画を優先して」と言い、その道路は放射状ではなく「京都市の様に区画整然とした都市の出現を期待する」と

おかし、豊島区に「ミシン村」があったと聞きましたが、いつ、どこにあったのですか？

豊島区千川町三丁目一角（現・千早四丁目三二・三三番付近）に、東京市内の零細な縫製業者が集団移住して「ミシン村」が誕生したのは、今から六八年前の昭和十四年（一九三九）のことです。

当時、縫製業界では初の画期的な開拓事業でしたが、平和産業として出発した「ミシン村」の理想は、戦時体制下で軍需産業への転換を余儀なくされます。ミシン村開拓者の一人、国保義定さん（故人）は当時を次のように語っています。

昭和に入ってから洋服が普及すると、縫製業者が下谷・本所・浅草など下町に集中しました。しかし、借家での職住一体の零細な家内企業だったため、事業の合理化と発展を図るため、郊外の広い土地に集団移転して「ミシン村」を作る構想が若者を中心に昭和九年に生まれました。そこで、当時麦畑だった千川町に一区画五〇坪単位で土地を借り、五〇人の移住希望者を募って資金を集めました。資金繰りがつかず、結局昭和十三年に四人、翌十四年に四人が移住し、計八人でミシン村興業組合を設立しました。各人が家の作業場で婦人服、子供服、紳士服、ワイシャツ、肌着、カバンなどを業務用ミ

シンで縫っていました。

しかし、昭和十四年から糸配給統制が始まり、一七年の企業整備令で中小企業の整理・統合が実施されました。縫製業はミシン五〇台が一基準とされたため、



第二工場前でのラジオ体操 柴田健治氏提供

昭和十七年に中央布帛工業有限会社を設立し、工場を新設して機械と従業員を集中させ、横須賀の海軍衣料廠の監督工場となり、海軍の略衣（普段着）、シャツ類、袴下（ズボン下）を作るようになりました。従業員は四〇人ほどでしたが、徴用や召集で人手が減り、地元の女性を雇ったり、隣の府立第十高等女学校（現・都立豊島高校）からの生徒動員で

労働力を確保しました。

空襲が激しくなると、山形県米沢市の空き工場に一部疎開したりしましたが、戦災を免れ、昭和二〇年終戦を迎えました。戦後はGHQの輸出の仕事を引き受けましたが、経営難のため昭和二十五年頃解散しました。その後ミシン村の人々は、縫製業を再開したり、地元町会役員として活躍したり、移転したりと様々な道を歩みました。現在、閑静な住宅街となっているこの一角に、戦時下に揺れたミシン村の歴史があったことを知る人は、今ではほとんどいなくなっています。



郷土資料館では、平成六年の特別展「町工場の履歴書」の中でミシン村を紹介しました。その時ご協力いただいた関係者の一人、柴田健治さんが今年他界され、ご遺族から中央布帛工業会社の扁額「勤忠敢行」をご寄贈いただきました。

この扁額は、昭和十七年の会社設立を記念して出光海軍中將に揮毫してもらったもので、二五年の解散まで工場にかかっていたそうです。豊島区の昭和の産業史を伝える貴重な資料として、永く保存・活用していきたいと思います。（横山）

編集後記

◆今年も残り一か月余となりました。一月は東京文化財ウィーク事業が都内各地で開催されています。この機会に博物館めぐりや地域の文化財に触れてみてはいかがでしょうか。

◆左記の期間は休館いたします。

（展示替えおよび年末年始）

二月一〇日（月）～二月一八日（火）、二月二八日（金）～平成二〇年一月四日（金）（よこ）

かたりべ

No.88

2007年11月15日

豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

電話 03-3980-2351
http://www.museum.toshima.tokyo.jp